

◇作家の田口ランディーさんが「お見舞いは現金と決めている」と書きだす短文があります。なぜ、現金なのかという点。ランディーさんが高校生のことです（ランディーはペーンネームできつすいの日本人女性）。要約して引用します。

◇「白血球で余命わずか」と聞いた親戚の叔父を一人で見舞う。やせ衰え言葉も発せない叔父は、震える手でティッシュに五千円を包み、私に差し出す。こづかいをくれようとしているのだと気づいた。

首を振っていらないと押し返すが、叔父さんも引っこめない。貰うしかなかった。帰り道に泣けてしょうがなかった。無性に切なかった。お見舞いには現金書留を送る。誰かを通して天に返したいのだ。思い出すと今もありがたさに包まれる」。

◇ランディーさんの結論。「誰かを通して天に返したいのだ」というのを仏教用語でいうと回向（えこう）といいます。まわし向けるわけです。ブーメランのように、投げると回転して元にもどってくる。悪いものを投げれば、悪いものが返ってくるし、好いものを投げれば、好いものが返ってくる。そうはわかっていても、ランディーさんの叔父さ

編集後記

んのように声も出ないほど衰弱しても、お小遣いをあげるなんてできないなあー。

◇『徒然草』百十七段は、兼好法師が良き友の三条件をあげています。その一番目が、「物くるる友」。つれづれなるままによしなしことを書いて、ゾーン（ものぐるほし）にはいつていた法師も、ものをいただくのはうれしかったわけだけど、兼好は、もらったものをまわしむけて、かえしていったのだろうか。ちなみに、徒然草の良き友三条件の残りの二つは、

医師と知恵ある者です。「知恵ある者」というのが難しい。

◇おこづかいといえ、お年玉の季節です。幸いなことに身近にお年玉対応年齢の子どもや若者がいなくなってしまうけれど、わが身を思い出してみれば、小学校低学年の頃までは、紙幣でお年玉をいただくよりも、硬貨の方がうれしかったな。ペラペラの紙よりも、ずっしりと重い方が、いっぱいいただいたような気になって、満足感があつた。それが、どうよ。今は。現代の小学生でも、お年玉は現金だろうけれど、中学生以上になると、スマホの電子決済でお年玉が行き交うのであろうか。いやな、世の中だね。なんて言うのは年寄りの証拠です。

正月の縁起物って、言葉遊びというかダジャレとつか。橙は代々で、昆布はよろこぶ、裏白は清らかで白髪まで長寿。長寿はいいのだが、きちんとゆずらないと。そこで、ユズリハの出番です。ユズリハって何？ 人工知能（AI）に聞いてみました。「常緑高木で、日本各地に自生し、庭木としてもよく植えられます。新葉が出ると前年の葉が後から落ちるため、葉を譲る＝子へ代を譲る」という意味が民俗的に付与されました」そして、興味深いことに、「仙厓の画賛や言葉の中でゆずりはが老いても若々しい心のたとえとして扱われることがあります」。AIがそう教えてくれる。仙厓（一七五〇～一八三七）は江戸時代中期の禅僧で、九州博多の聖福寺の住職として軽妙な墨跡と逸話で町衆に慕われました（お名前



写真 千田完治

の表記に仙厓、仙涯、遷涯などがあるけれどその是非はここでは問わない）。そんな禅僧がユズリハをどう描いているのか、知りたいと思ひAIにふたたび尋ねたら、「ゆずりはの思想を、これだ、と端的に表している、確証ある仙

の名を知らぬはずはない。もともとが、新聞夕刊連載の短文なので、お名前を明らかにしなかったのでしょう。この高僧こそが、博多の仙涯和尚さま。なんでも人工知能にゆずっていく未来かという、紙と活字の中に英知が埋もれています。（住職記）

連続シリーズ「見つけた」

だいぶ前のことになるけれど、父親の年忌法要のために本堂へお参りした丁子さん。法要が終わったあとで、少し深刻な顔で聞いてきました。「今度、東京にある仏教伝道協会ビルのレストランに勤めようと思っています。その協会は危ないところですか」

私は笑いながらこたえました。

「だいじょうぶ、立派な組織だよ。たとえば、ホテルに『仏教聖典』という本が置いてあるの知らないかな？ あれは仏教伝道協会が作

って寄贈しているんだ。日本語だけではなく、英語はもちろんのことカザフ語、スワヒリ語とか



中道に立つ



して素敵になっています。どう変わったかというところ、まず、少し小さくなったこと。次ぎに以前は一日一日が異なることばと異なる絵との組み合わせだったのが、絵の変わりにカラー

写真になったのです。

しかも、写真は一般から公募して入選者には賞金があったりするらしい。例をあげれば、まん中にかかげた写真のよう。

コンテストの講評には「真ん中に立つ白いサギがイメージに合う。シンメトリー（対称）の構図も良く、色合いも白と黒と間のグレーで、グレーが全体的に中道という雰囲気を出している」とあります。おそらく、はじめに言葉を決めて、それにマッチする写真を選ぶのだろうけれど、言葉と写真の組み合わせが絶妙ですね。

いつも写真を使わせていただいている千田完治さんは以前、入選しました。ほかの方もふるって応募ください。くわしくはへ仏教伝道協会・カレンダーで検索すればホームページにたどりつきます。

日々のなかには禅があつた



住職記